

30

29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0

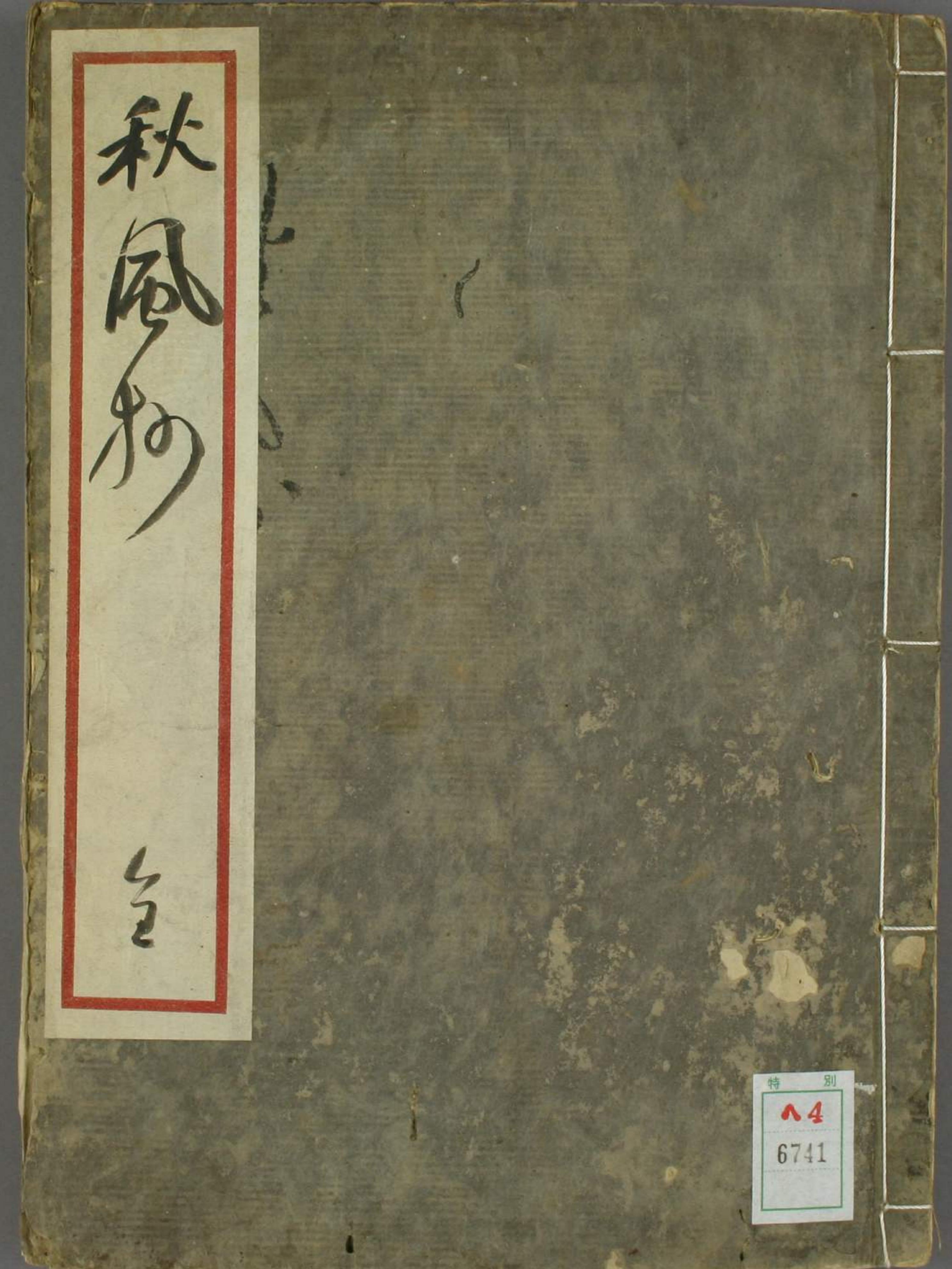
JAPAN

mm

特 別  
A4  
6741

秋風

ム





秋風抄序



やあとされぬひそかに、やまとくら  
にてまもれ、せきのあやまつるに、生  
え車ねさへなると、まことに、  
あととしらめ可むらわと、わとまう  
人あまく成ふるあれど、いとんとくろ  
にうのうわくと、そのまゝ、やまく  
といふと、家をつきとわくと、まくと  
す、うちが納言為家、よく欣れむ

じきをえくのと樂へもありまつても  
えんあるよりとしてやきよもと御風で  
きとへよ陽れんがよもよい美養アリ似  
もねえ玉アリ似てうとうとくおふくろ  
さまわせなさにあると

ち／＼とあおきよ御使／＼とおはり  
我神れ海とちとほの國も＼＼酒＼＼わぬ今  
どうふありておつる纏がきよ御使／＼と  
正三位御家／＼と樂／＼とおひでちとく

う／＼おもちもとあはげ陵園妾は春林  
思ひのきりとまし松門のあつま背筋  
城れ秋風とまし方ふ／＼とましのそ

せ春れりや頭はゆう水先人久ヒ合  
御育生くらじよとまくくれの御  
そくもく／＼身れひじよもやく年  
前たるまし信實れむうらゐあ／＼きと  
く／＼て心ひだまをやうらむこまゆ

なむよりあまてとぞみづかの貴舞れなま  
れ言わおつまくよとまし小牛くら  
えいじりやうどやもうちわ左へとまきわ  
てすさてみゆとうすくへとま

わがの馬は風に吹かせしのれ  
ねあそびや恋をながめのれおとこ  
ほひに然はばるべとまくよとま  
あまくまきのひがつてまくよとま  
まくまくまじきよとまくよとま

称へ風の風あるやうとおそれ舞ひう  
小荷とれ風あるやうとおそれ  
またもひじて称へまくよとま  
重の鬼とあそぶ事とひまよと  
まくよとま

暁の神あにすれ成れとまくよとま  
皇太極を後めあひあひまくよとま  
ゆとまくよとまくよとまくよとまくよとま  
まくよとまくよとまくよとまくよとまくよとま

快車一つあると、總かたまもあつ事  
ありやうつむか

極樂のゆゑもなしよりて、因縁の氣  
あくまで往るゆきりよす月がりの夜のさ  
らのなれめでとも、林間や駄馬とねる小  
弟は、隆祐の子であるあわてて、とてとてとて  
ちあへがましむきすもあへいりて、大約  
路小止みに在り、素すきまたれど、とてとてとてとて  
容歸とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

かひりかひり藤波浦かわをあひて、浪を心能  
行ひあくまくお育むる、まほのえふあくまく朝  
こころとまとめて、うねぬまと、柳のわらわらう  
のぬふふのひて、と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉  
をつぶつて、心とねどうわざとねどうわざと  
れなまなまと、と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉  
かひりかひりあひまくまくして、と葉と  
と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉と葉  
せももあひまくまく叶とねひてとまく

正月は年始よりは行かぬひまゝの油井ノ  
名とどきてうきまをすとえへりとわする  
あまくわらひ清ひ式とてんぐの／＼の  
ことあるたゞを一の式ふん和平が先  
花は實不諦古禮并卑陋之形を高  
之黒衣のとくとよやくをもむけ  
この如ふうがましある／世ふるもさう哉  
よすはますよのふとゆすら  
すれちる宣家家隆等のひづれ前人

人丸のゆきひよが／＼もふすすとがく  
なんあらきくらまうとどにねひ油井  
らきひのうちのひ／＼やするつるわよ  
さきよ視事あきにほもくひきまく  
ひのとよもつるまくとわれむ  
わゆ／＼さくらむらかてもくまくらすと  
けくまくさくと

前半納云宣家卿欣  
詔書元和五年正月五日

曉の朝まで秋風が有ひまつた  
今朝も涼爽な氣で心も安寧なる  
おもてが浦のあたは穏やかにゆき  
名残は暮れゆうきていくよと立てども  
物なじる事なしと越えて人みなほの涼風

後三位家隆の歌

重の根網ねうぢかの上を走る馬車の  
風ふぶきが川の吹き音にさう友と音がけ  
たる今よりとさう又秋の月とさう

いなかくわいもわば四度度黒秋の夕暮  
ゆゑの宿の元成りてお車の事としむ  
舊家鐵の在りて油舟また  
おのれのひとのいなかとおのれのひと  
のとあゆきとのひととあゆきと  
おのれのひととおもひておつむ事  
おこすときもすらおもひとあゆむ時  
うつむとほりやうまへづくとまよお

ほくとくせりかくもあうともあきゆゑを  
ゆふてすりすりてうきあくとむらさみ  
すくにれりむらそんのあくちりだく  
きよきようれいなまことをかくす  
えくおう今秋勅撰ふる今世の書  
とありうつまく方体よ集めきてを  
門内古當初、おすとゆがて後松  
遺小墨へこま内相好れ撰集い  
てうちやうおめわすれせり

いふひよんやひよんやひよんや  
すすまなくし別勅ありて御入  
庭の御まへ勅すうり三毛篇を  
ちまらふ槐門よりおわざる美絵  
名をく射山おとゆくすりのとく  
もくすりひらくさんくせんくわ  
ちあき、おけはねりくよとくと  
りくわくのとくとくと玉とくわく  
なむくわくとくとくとくとくとく

ひきりて、わくよのすじゆき  
絲竹のよゑとなまとも給人ともに  
きくたむれまえりうれども盡土  
えりゆちわくうとこの欣しまく  
れゆくうりゆへまされいは六義  
のむしまさりさまへ一うれど  
うとあさるふすをてをゆうなる  
うまくあふすをてをゆうなる  
おうきまくら葉といつて三日

絶句上中下巻とすく名と秋風比  
拟とすとさう建長二年四月十  
日小野春雄ひううう  
ともりゆく事もつなま

秋風抄上

春哥

花拂政家百首小山早春と

正三位知家

岩屋山天國りや今、よそあつう雲かよまくまく

百々すす中小

入ぬあ拂政

久すあまくゆてあく見や詠代喜ばんりぬらる

早春と

花大納戸為家

いまとしまさきくひがみあけし小室へほづ

藤原信實那言

寫は考へても小新玉の年も去へとじやぶ

義家為氏那臣

春家也京の故院が御のう宮今やさら

鹿と

三輪が春日守りかきうえしがく秋の

建保四年院拂百三の事可

前太政大臣

かづしとる三輪が成義道をとへてまき

魁不れ

初夏あ因大臣

足寒のひに雪ねむかすもやれども未だ定か

子又百番守金乃へ

宣太后文孝之後康女

心室の御す古川守之不まに三輪院とおも

入道相政家百三小

正三位左家

柳枝と君代と御の家小うへ心ゆゑあれば  
依梅翁友 藤原行家の那臣

柳枝翁やと御の家小うへ心ゆゑあれば

柳と

信實御主

居

表もなひまじくれ掉姫の深ゆきは柳と  
建保軍の院法更に表す

入院前持政

かどりのあまつ家風まちがて是ゑどく風  
花す

あ持政左大臣

任約山わづら雲とうまく水をあひの高花候に  
藤原經平耶

尚の家中納云

候われいかひはれおふと半のりみのましやく

鷹司院師

守よし稀候わとつまやまくいふと半や三え  
魁不わ

持政左大臣

余れの業を全候よまく花を我そ思ひどん

花十之少

持政大臣

かひこね首ともかたちであつてよめまむ見

佐古松せと首に

社主あ同左臣

うゆき春割りよりまき紙仕をもひのをも

院沛百事に難歎文

沒三位行能

以あらゆる事にあらうれんが、之を爲むに便

善奉と

行達併成

いふせん才ふか計均しよがくや善時と別

友原爲氏相臣

布ヨリテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

入石之景王

玉手より食代を以て發表て其威を一層加え

院沛百事に因心と

前大納言身全良

よも小山の娘ひよ子美也と妻の萬子をも

夏元

子又百事行合

室太底文左佐成女

妻の父と子の事は、此の事は、間接的で、或ひは、不

夏秋

衣笠翁の内侍

朝云とおがたとされがての代宗今國也

百首文中少

前持政左大臣

やとあり育む能てありはれもと時々

入政あ持政家より題とそつてすとまづ

小齋

持中納言貢事

祚よりきのわきにまもきよきて想む

洞院持政家百首ア

沒ニ位能

じきやうる善能ひの内もとあいとすと

郭云と

没ニ位能

當作まつての郭云とすとめと

入道前持政

郭云をまきてあふる又肩ちよ(至多)

而百首には郭云

院持素

我もまくまくてつん内もうちうねのひうと

魁不知

入政元家

さまうーきの立新云者(夏)いり写真

九條あひた

育と秋と冬入稿(下)あまゆや有す

院持百首アスル郭云

右大將通志

橋ノ句ニ月の河をりて多うじくか  
若狭政家百首小室盧橋

藤原隆祐

思ひてもじこもまうそらむ毎子室山橋  
院山百首アリ早馬

并四行

小室小室山のあわいこそ袖ひづるまうと  
前大納言為家の家のナヌミテ  
入道あ持政

又角山小室山のあわいと魯山の魯山とあつはれ玉

洞院持政家百首アリ

前大納言為家

五代山と山と感ひたかみのこの八月山の定

入道あ持政家百首アリ

正三佐翁家

今之松まき神樂くらくわふかくみのひひ  
入道あ持政

夏の葉也よ(音)翁とあくらもてうる葉が

夏テ

齊司院持政家

方小ちやか林をうへておまくらをせらる  
縁縁経百々り

事の絶言為

子重もううもあつしも何處ひづれど

藤原氏經

なふあきこむむすにあすかに金玉丸あ

タ立

源益氏

くてもやれどもうみと相承くわうて候

建保年院御百々り方

前政大臣

風さうす以松坂古にあとのうてうち村

院政百首ノ落葉

注三位行能

秋のうるえもあらぬ落葉小風のあふるがとう院  
題かえり 平室村野居  
心なま風すれ秋と併せまづくら葉もうさん  
子々百萬寺公守

赤陽門院哉景

かまくら批ひく夕れのうるえのまじの秋は風  
院政百首小早秋 や將内侍

秋のうるえもあらぬ風のうすにしゆのゆう

洞院持政家百首に

西之位威重

うそきこていくかあくの國ふく方かし秋

里早秋

入室之承款玉

うちつまく涼くすりね夜衣膳伴<sup>火</sup>里秋の初

建保四年院政百首小秋守

入道あ持政

五ノ川すわどわづれ秋風のゆあひと約もと傳

月夜社入十三小二早秋

右共清持是空氏

諸友小廬<sup>ちか</sup>す心<sup>こころ</sup>の道<sup>みち</sup>よりれ風吹<sup>ふく</sup>は早<sup>はや</sup>の元  
前橋改<sup>かわ</sup>左近<sup>さきん</sup>の内<sup>うち</sup>七夕<sup>しづく</sup>を首<sup>くび</sup>よぬ

せゆまくらふ

藤原御家源<sup>とうげんごけ</sup>臣

天川<sup>あまがわ</sup>を身<sup>み</sup>よきと年<sup>とし</sup>の向<sup>むか</sup>ふもとへの源<sup>みな</sup>す

野山<sup>のさん</sup>

禡<sup>む</sup>司<sup>し</sup>院<sup>いん</sup>接<sup>せつ</sup>本<sup>ほん</sup>家<sup>け</sup>

兼<sup>かね</sup>ノ葉<sup>は</sup>小<sup>こ</sup>風<sup>ふう</sup>吹<sup>ふき</sup>よる事<sup>こと</sup>す也<sup>よ</sup>神<sup>かみ</sup>のとす河<sup>か</sup>をまく

着<sup>き</sup>原<sup>はら</sup>隆<sup>たか</sup>祐<sup>すけ</sup>

神<sup>かみ</sup>の宿<sup>しゆく</sup>むすめと風<sup>ふう</sup>吹<sup>ふき</sup>むすひと志<sup>し</sup>す秋<sup>あき</sup>文<sup>ぶん</sup>

暁<sup>あ</sup>病<sup>び</sup>

入<sup>い</sup>道<sup>ぢ</sup>お<sup>ち</sup>持<sup>も</sup>改<sup>か</sup>及<sup>及</sup>

冬<sup>ふゆ</sup>の雪<sup>ゆき</sup>す<sup>す</sup>神<sup>かみ</sup>と病<sup>び</sup>候<sup>ま</sup>と<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>篠<sup>しの</sup>鏡<sup>かが</sup>

入<sup>い</sup>道<sup>ぢ</sup>お<sup>ち</sup>持<sup>も</sup>改<sup>か</sup>及<sup>及</sup>

前大納<sup>だいのう</sup>玄<sup>くわん</sup>為<sup>ため</sup>家<sup>け</sup>

移<sup>い</sup>乃<sup>の</sup>立<sup>た</sup>て木<sup>木</sup>の林<sup>林</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>病<sup>び</sup>候<sup>ま</sup>す

院<sup>いん</sup>門<sup>もん</sup>百<sup>ひゃく</sup>合<sup>あ</sup>す<sup>す</sup>林<sup>林</sup>病<sup>び</sup>

正<sup>ただ</sup>之<sup>の</sup>往<sup>むか</sup>家<sup>け</sup>

今<sup>いま</sup>の事<sup>こと</sup>望<sup>ま</sup>む<sup>む</sup>の<sup>の</sup>木<sup>木</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>病<sup>び</sup>候<sup>ま</sup>す

女良<sup>めら</sup>元<sup>げん</sup>

藤原經平<sup>とうげんけいへい</sup>

病<sup>び</sup>の<sup>の</sup>木<sup>木</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>神<sup>かみ</sup>と<sup>と</sup>病<sup>び</sup>候<sup>ま</sup>す

野外席

院内東

秋ノ月もすらかの野外席。今やあとあと立  
白き方仲小。入道ちね改  
春日社ふしきゆく康風うき秋風むぢり  
佐和社二十三

がよつてのちよてつよ秋よかくや康風む  
九条内大臣家三十三小久少

佐和社

小えいせうひうきと美し樂ふのまへあく

千ヌ百番手合歌

源興歌経臣

人ひようすきわど三りわれよをさうへ松風  
院内百三ノ小晴風下野

心よひておなまそ葦かことうさぎ先の林奈  
蓑虫と

前園向左大臣

きらくひとひだりも葉の葉りの處の處とよしん

あ核政大臣

我とすきはまの葉ま核小徑とよしん  
八月前核政家私二十三

正三位和歌

病すよま秋すすみぬ文章も葉落枝疏む

蘆葦門院がわ

草木繁茂病やうすむらさく神の御内教書

百々千小

衣笠あ内太臣

久松院院事と秋風小葉来るよしのとす

秋夕

院拂衣

秋もおひわぬ風もそそしけの秋もあひき

柱大納言海國雄

秋秋のちやうかとそと秋夕とくはとほ

西園ち人をあ久政左衛家用十之余

柱大納言と相

なまきもあくもねまくらうとまくはれぬ  
順徳院用時約用とすす事と

西三位和歌家

うのそとくとくとくとくとくとくの月  
院山月湖月

承明院院少主相

えりすのそとくとくとくとくとくとくの月

院山月

院少主相

堀窓乃浦れりうらの月と金と雲

家元公了月前麻

入居あ接改

三室山房のやうえに景もよす桜庵

藻壁門院少わ

酒をまくはれのちのやう春

秋二十首小 あ室白な大屋

いと秋うどすうう才月のうやまひかし

院と月華夕秋

桂大納言云お

紅葉はうちわ久本全齋月のれぢう、  
ゆ日そぞうと月

梅友は使乃経

ひよみのま室の紅葉月のれぢう、  
月と 前ち改大屋

いとと風ひつきなまき秋はる秋はる  
九葉あひ大屋

月はゆはれのうと風はる秋はる秋はる  
夜坐あひ大屋

すとれはあひのうと風はる秋はる秋はる  
夜坐あひ大屋

鳥羽流後まで月前庭生

大納言曲のほ

音よき流すをまかに秋の月の  
色不え 岩は家中紀云  
くら月とおとだもとひよりまき秋は東もと  
式範門院御画  
さりやなれ松とていくお月よ袖の草  
曾た底室更後盛  
まき同穴ゆれ風のうわよ育うねよ  
大納言の家

かく我にゆく秋月りゆうとひかん

秋世首小

藤原為氏祖

秋よ月とそぞれゆか木ひし育むみゆ小

入臣あ持政家すゑ石門月

信實相生

かくお風の颶小竹代つてもる月氣

東源月明とゆふ事と

注三位伴忠

かくお風の颶小竹代つてもる月氣

順通院御内情月とゆふ事と

前大納言基良

林代うわわうかへ今うしやまくきよ

曉康と

ちの御云伴

はなまの眼のまめに書ふ山風の月

院門百葉うれ度

佐實羽吉

秋風すまつてのあそび

相度と

蓮生法師

秋林風こきて、おのれの愁をかくす

那外雁

藤原景春

乃なまつて秋病、じき月をうるる野

秋千多手

瀬瀬蟹門院かね

冬のむ暮るい處、乃て病しとの下に茶  
を支百萬すえのう

宣文院室主後成安

うるくやまくえ秋林風あり風が野す  
入道翁持政家一月をかねす

前持政左大臣

吹風うるくじり野す  
かねどんれ

建保四年院門百葉う

あたひ大臣

草の原下葉やもじ風のひやうかくね葉吹  
白扇の付乃百多うり原麻

う、かく海赤う原小弓麻丸を吹きうれを  
入念あ持政

三三位知家

初喜のさやとされ、掉度成化弓野町うれに  
長谷ち十八首うれ

入念あ持政

よまよよひがひの初喜風葉葉小弓也衣う  
影や和

槍車の玄滑季

おほての角弓、神毛の高毛下上毛と之く右衛  
院拂一百多うり閑持右

鷹司院拂あ柔

おひねの左拂やもじ風のひやうかくね葉吹  
子又百番升合のうれ

白扇大底支支後風女

ゆき風の角弓とううつ絆風里に吹うつす

順徳院拂時升合小屏拂持右

太陽の流轉

衣うやくやうかしし人の渴きと社の月を  
念も持故家百三弓

す月の草の草の月と玉につまむ有月の月  
匙、かみ

住之位行徳

日暮在寒山城の今うちわ松えと作らひ  
経音社百首弓秋歌

鶴の月流拂

寝坐よれ鶴の月のさく月がくゆる

尚ほ家伴納云

わがよ袖のさくもぬるもともせの葉がくゆる  
院すと立樹立葉

大納言典侍

し月あらわへりうかざり月と雪の葉がくゆる  
洞院行政家百首弓立葉

若左近右京

さうすよくあえむせむれいじの葉がくゆる  
秋三千弓小  
義家為氏御脣

雲うらきよかくあわづむ行てます立葉弓

小聖社す会うり山家

藤原為継相臣

私心の事とがわづれ事無ふ今之を失ひ

院山百首下杜江葉

夜聲す内大臣

村井あらうかううてまく海なまく松の葉

洞院持政家百首下

前大納言家

小倉山積りちと秋風日と空す

弓也

水道院山内百首す会のう

前大納言

秋ノ夕の霜がさうる村山の鳴きす山高也

題一

松中納言清季

秋ノ夕のじき深澤山と文山の行けあはく

源有長那臣

父よそぞ紅葉ちきよせ雪風守すも秋の根かし

坂高那入道二品教主助家五十をも

注三佐野能

田よりシテうとうと里に生の紫とみれの秋の葉

子又百首す会のう

太陽の夜越ち

夕暮れ梢とて 風流に萬葉風の秋れの里

室町殿文左衛門信成

父の浦東夷まくは風流もよき秋れ萬葉が

萬秋

式範門院清圓

むじゆかのよき道わづ今命と三日秋月  
入道攝政百々と和也ノリ

夜望あ門庭

李平生の歌の神うくき湖南春水す秋月の歌

冬秋

六帖題序に初冬

信實那臣

乍一見も阿蘭陀とし 陰陽も此身を乞ひ外  
子又自喜むる處のうへ

太陽の夜越ち

冬来ぬと西すよりれ御郎とのやまうるやむ  
あ行波家にて是とゆうてすよみゆ  
きの小舟と 藤原行家那臣

まゆやまとつやもとゑひそめあらわせ

前右政左臣家十又三岁

友不外也哉那良

山風ノキシテうづれ御月ノシテはなすを  
お右政家百三岁小杜初冬

藤原隆祐

うかく生國社ノ神官月日をといひよし

影

慶政上人

至是處ニシテ乃ク御月向をとひまほり  
四十五の御百三岁小田家ノ時雨

入道前右政

是處也國之高の蓬とわきぬとども無歸

時雨

前右政左臣

御月ノシテはなすを神官小杜ノシテはなす  
於中納言清季

又今をこの處ニシテ一村のアタサウカ  
六右衛門

正三位家

あらうれ我身しおちぬる月神つづりはなす  
大納言為家の家ノ百三岁

信実行

此本モ其の事也南風ノ室ハ御宿モ定

暮山時雨

明称法師

夕それ河風すて夜の月の下にめぬすなり

園落葉

墜ち法師

萬葉のまかとねふまうてやどまくまの  
建保元年後古一百葉小文

前政大臣

よし葉をかづくら行はるる見ゆあらきり

橋上院案

院拂案

山へんあすや落つて葉葉くまくま乃材

部

攝政ち政大臣

林序ノ次とおもひ河風の常神のれり

夕附

入念之京就立

すらうかまくじ寒いをかのよくにばる

冬行

未大納言の家

嘉吉元時因葉根ふと時の行はるすとて

追三位行能

竹のやく葉根ふとての月にそむく

九葉も因大臣

鈴の音やく葉根ふとての月にそむく

附百葉小池冰

院拂案

毛風

船とあがれ今もよひる霜がまづきむれ

氷と

入道ち持政

吹くれぬすすく風ふかと川七郎の宿やかく

九条あめの大臣

葉とすみや浦とすみやかくわおとよの風と風

池の鳥

右衛門皆通城

冬ましのまの氷の氷かでうわら成わらむ

院山百首う池か

友宗乃健翁

わがまたやわらかに化すいはすいはすま

友宗乃健翁

湖邊氷と 平重時相臣

春浦や河をそく氷の平波よせうらじと風

玉すき

仲宗御党

田とをせうまく行せふやむとて書よすみを

とみを

元持政家百首小瀬すき

瀬入の芦らざわまの小夜すきにほうりはまは

千尋と

鶴司役新翁

ひづねのんびとゆめのまむすみゆきゆきゆき

千尋百首すきのう

志の陽の虎越ち

風雲むらう谷の風うり下まきの里の宿の裏うらや

因辰夷

拉大納言良基

松の屋の事の集れらのとしおとよひおとよひ事

久古はうこ

院寺東

五し女玉すらの事の主をねは小きくわいの爲家ふら

前院政た大臣

あらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

絶縁源道百景小

前大納言の家

いふせんしのうかわら高はまくもてうづく月はま

信實御臣

かく

吉元

かわいゆ

すずらんのね

たまこかまくら桂家

弁内侍

さく

よしのとくら病心高ふうちあくとく

尚村家中納言

正和ことくわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

九条あの大庭家十丈堂ふる所古

承明門院少室相

おそれ事務はまどりとおもひうちねらひ人形  
子又百萬字金手

赤陽門院謹前

おまかせすうのほの國をやうへ立けり

寛喜女史内屏風手

あた政大臣

網の柱のまきがけ焼立てさゆつけよせし人  
入念ち持致百事とわむくらふ

衣笠あ内大臣

ひづれしわとひのれお年ねのやうの我方やう

今文ふかくお年ねのうちお年ねのようお年

ト被急直宿詔

夫ぬよそくお別のちにれへよをきま年ね

院正百萬字歲考

藤原行家御臣

ひづれお年ね背向ておこきとひくちのうかを  
そく

秋風抄下

憲秋

院涉百首り、寒風立

前太政大臣

夕暮れに秋風が吹き立つて、

寒風立

松大約云人相

あらぬよひもとふるに身をゆく、急に枝やう

色飛院にては前憲秋

院涉寒

心きりて身を寒え、極うてさへやう思ふ

才又一日書の合ひて、

官左近宣室更後廢

いふ事よりて心悲れ、て二ひ入る事めぐまと  
立す

承の門院小亭わ

立す、の間、すまづく、身じよしをまづく、  
院涉百首り、寒風立

并内絵

事終てねむる、心悲く、身に満うて、か

幕末為氏御臣

我が身すらやせぬ、浮はぬ、中まで、せんとむ

入道前持政家百三十九立

藤原行家源

國にあまを承うけ、彦興の神のまへに刻へられ

寄林立

小治通直、富祿

私風琴子とての事、義和の事、やまとを

惠立

豊前守保

うちおとせ、そぞり君あらん、経とよせ

立

藤原高達源

六角じゆくとてわづか、氣とて義人

六角也立

元の御家

九条前内大臣家才三字不右助立

麻衣つ院小室相

ひそちゆうす、おふせきの名前もよきよし令

住吉社一百三十九立

鷹司院肺

瀧河川奥の山、それから山を下るまでは、

立中少

入道前持政

さくまえ、空手といひながら、さんあみうちよ

立中少

我立海邊いだてはうへひづれを浦うらあ魂  
院いんまで寄海よみ立たつ 桶おけお使つかわ絆  
我袖わきのくじやかずらまくも海うみ塙はなのまきとと  
宍松立むつまつたつ 犬けん高たか氣き  
波なみよしよし海うみ浦うらなしね桂けいよがほやうゆく  
前大納まへだいのう云いふ家いえの家いえ百ひゃく年ねん

下野

易しより川かわいとくえでひる再な鳴めりてひそひそ  
不達ふたつ意い 廉壁りょうへき門院但馬  
うじうきひりうねすくこまやこまくあほ室

入い念ねん前まへ接せつ波なみ百ひゃくと和わやくふ

夜室よしつあひ室

うらあふうううはくうに驚おどきとく風かぜれ立たつさく見み  
院いん門もん百ひゃく年ねん あちの云い奉まつ良よし  
あひうら春はるはととまくと人ひとのひりうととれ

柱はしら大おほの表おもて三さん相あわせ

けうくうううううううううううううううう  
甚ごん也や立たつ 九く柔じゅうあひ室

才さい外ほか秋あきの秋あき立たつ也やアキと壁はなよりう

秋あき立たつ也や

サわ内うち

わとすくはくととを連れておまづくゆす

前田白山院

我とよのうてやうと新羅にさかわる江原

約意

尚作家中約意

そのうへ今度はいふかね今やう地とおとく宿

六帖越え

ちち酒食為家

山陽行あがる月とよしまでひとちだと君と約

西三位知む

奉手んとぞ寒寒びれ松原小國の役戻とまで仰

家方達意

寂智法師

今度よのうてやうと新羅は少遠新羅

夜立

方度時羽

まよひかへりとて元とかとてみよの度に

院門前まよひ家方意

下野

かよひまよひとて元村まよひ人ひよ

家方中少

并向仰

まよひまよひの仰よめ方に何とく今度

宣行院一条

仍とむらまよひの仰よめ方に久きれ

家風遠

院防寒

りとやの此地の風はねじまゆひきの處

六佑道寺

西三位御家

袖うす事あれ花のよあらぬ風よめく

愁不知

尚你家中納言

不至て此の御子の名居とたれやと城と

都

おとよと御手を拂はせ令とおん篇より

前左政右臣

欲候はくの内定より万と云てはとぞと申す

前左政右臣

右共未第參主氏

きく日あか年うさにいふよのうの事あらむ

寄園庭

右原縁り

今まふうまやとすおほれ園別へとよまくに

三三位知家内家と別立

信實殿臣

あつもあすれましよと立誠からく

立行

かね内侍

学せよとおんとすのよ今うちうねよとだ

尚待家仲納云

もひとたのすれども、おまえは別れや  
洞院持政家可也、不遇也

藻壁門院但ら

おほきいとおまん、濱川にゆく神事

鷺之

處原隆祐

濱川主神、おましとおもと、おまし

寧池庭

源益氏

鳴鳥城、おましとおもと、通じそし

寧河志

處原季宗那

おほきいとおまん、寧河志

経承持百三郎、萬民那

わ、あやうむ伊豆ノ水、おましとおもと、おまし

六祐道

おもと、おまし

おほきいとおまん、寧河志

佐佐木百三郎、吉可

度司院持察

おほきいとおまん、吉可

子又番、可公のう

室大底、吉可、佐佐木

夏夜うらやましく成る元禄月の夜神

恋歌

夜露あつめ

正月打こいはんかの今まにあらわす

承明門院小室相

室のまことをくわすく汝社にて絶対に能

鷺司院按察

母とちばせほのとんのをすとまきん

式軌院内通

うきせうと因すみれやまのあれ

蘆壁門院少翁

せうとうおふみて高きはれせぬとよもえ

やねゆゆ

じとまの夏の本に松竹をくわくわ

院内百葉小室月夜

并山作

神子月坐まむ林をくわくわと櫻花人

月あさ

紀宗氏

わくまのくわくわと櫻花のうそ袖謂ひ

き夏立

夏原為れ

わくまにくわくわすれすれと今夏のと

院西可きうす方枕立

承明門邊山雲相

まくふとくまきはめかくおれようとせう

毛うも

あちのまきは

いはきまわしのまくとくうりの處やう

慈司院梅あふ

爰とを思ひ成る筆とせんのまくと

院西首事

風の流寧祠

うそく我才ふとくとくのむじとくは

タ立

蘿壁の院がわ

う人をひづらにせうじゆくは浪舟とてう

子又百萬の金歌源興歌源

今とぞさひとせき松の木とくねやまくいは

秋立

友原の聲歌

今とぞひとせき松の木とくねやまくいは

あた政大臣家才とくふく

檀大納言不參

うす風ふわうと名あと玉車と仰つと歌く

檀大納言実雄

すと風ふわうと名あと玉車と仰つと歌く

院内百計よ身風立

空石室を支障致

よひそひの事と手を向ける事は風ふきに  
家を失ひ  
其の御有者  
因まわるや思及の事はうつて人の心と  
家を失ふ  
極大の言宣確  
オとく何事か狂歌の事と  
上流見方  
あたの言葉家  
いよとすれど浦川がもぐら(きもぐら)は  
九事あ内庭家三千三ふ然立

涼具鞆那臣

主をふうに幅やく黒縁えりくわくわくわく  
あ折枝家百計うり絞立

佐實船

まくらの葉のまくらて立りのや思つてなし  
遇不達立

源孝行

そぞよおきがりゆく只人と暫くかくす  
院内百計にまし歎立

蘿蔓(くわん)の根但る

うやうとくとせとせふねじてのまくらの

也ゆふ 在宅の圓忠也

かくもとまくに敵をうりあひ下すはまく

入居お接取

アヘの候毛なまてほの神のあられ

院告前不立家相立

舊司院持素

いふ事との如き年をえり候まことに

立す

ち行政家臣ア

かまつたと正にけりはいふとシノハ候かれ

蘆壁の庭かわ

ひよしらふオトナサセテアシカニキム

在宅乃氏相立

うきにえまゆ仰きまくら候多き方よりき御少

院アリ度モ立

梅家徒侍為

サヘアリ月あつと御名はくやるむる候

住立社セラミト注三佐原氏

サシモアリ小内事、モ税のとさぬと申れど

申す

在宅の未皆主多氏

住室相立

わ月はうきわき小盛つてひづふ人を  
衣室あひたま  
おもあまじきてやうすめゆせふ人とまし  
るを

雜哥

建保四年院山百三歌

入臣お接政

我の國の事の國の事われねやうてりの御  
帝王一系もといきてこしつく

中原源光

計代り今後君つてころもまむつまに能く  
おちぬる言ふ家の百三

税込成茂

君さみのん風ふやかよすせうるうよひまえ

毛一介

注三住仲忠

翠の春すとすと日約とつてえや  
二重院禪波女

春の東山すと常秋とすと翠の春すと  
院禪行公のう

源俊早

さよもうなまよよきまむを  
高見と  
平長内  
さうてんじうひかはせたれ色小暮と感と風と  
あゆ部云 蓮生法師

限すとすと海とすと山をのふ月はぬふらむ  
因居重る あちの衣と冬郎  
乃ひそにたまてんにねせつと秋のまうの聲  
前大政大臣家十又首小

桔大納言實雄

いきり秋行海の高そとすと山と秋の月  
入臣あ持政家とて槿と  
從一位倫子家尾法  
いの藤木翠とすと白露のまよ船とれ槿の  
衣笠あ因太臣

月行

月とてはまことに年とがままでいつほとを方ふ  
かづりのまよとく林のすじにてれわうす月とち

赤太郎云伊平

すふづりのまよとく林のすじにてれわうす月とち

三位忠宣

秋のまよとく林のすじにてれわうす月とち

正二佐知家

月とまのまよとく林のすじにてれわうす月とち

信實朝臣

すじやいはまよとくとまゆふ西の湯の湯

法眼長尋

ちの林のまよとくとまゆふ西の湯の湯

前大納言賴政家十二

三善康明

絶はる朝の月小鶴ひて白モミガシ松浦

前石主公綱

すふづりのまよとくとまゆふ西の湯の

陵園姫

萬のぬけまよとくとまゆふ西の湯の

越から

義淳法師

年とてはまよとくとまゆふ西の湯の

先後相臣せとのれでが事あきらひは  
してらまつ

小倅為京

安達主とて高橋信の實をりの御内里行  
毛川

下野

どちらもじくかの又祐少主と御人等  
前後政家臣等と  
山田とよますや氣勢をかく榮に難をす  
入道之京就王

せん中をかかへて御内里行毛川と

院滞百里うる巻

植納忠伝

江戸を去つて詔もれとくふくと年か  
ち中御内室關

つよとくわらひいそと松下年と善め  
題多  
慶政より

もとまつうやめの事すとすひたゆか

右原隆祐

なむきてくとまと氣をひき事えう  
酒あおづからかでやまみのひづき

山中行の事

内宿

この風景をうかがふるに爲り宿泊する  
洞院村故家百尋りの家

此三位威實

おもてはうれしのよみとあるて、宿

位三社百尋り

尚ほ家中的云

とく不思議の夜の洞院村の風景

拂面さうり旅初

院御製

かまくらのまゝの如き

前大内家

家の後ひの君のかへまことより御代  
四月廿日百事小江月

入内侍政

わゆるの江原寺より御代神れりと  
海邊月と 信實親臣  
あひの邊のもの都すてはがたきつるの  
洞院持政家百事小江  
風不蓬ひよきよまくうきひわきく  
院旨を小江月 夜原隆祐

ちるいに邊在れ故てえれくひわくある  
鳴病 正三位  
友彦ひよきよもと者うてうすくな移え  
海邊月と 入道三忠親王  
秋山わらわ破屋のねうね入道つうの著たひ  
九葉内大臣あせよ 下野  
わづとまとまのすと意氣者ひなみ友  
院忠義  
おれとまとまのすと意氣者ひなみ友  
院忠義  
前持政大臣

ひうふ成る事そと身にいはれまうか  
九条あ内大臣

我うふ浪のまゆるいふくらんと櫻と原

臣三位伊忠

行ふ三日まくらひゆふ見ゆす斗歌くいせ

若原忠益相臣

何事ともまづかく余よもうとおとよ

松大僧院實伴

なきこと與心がままでもうやつてまたせゆ

因地法師

元蝶せとあふきをひんべんじゆく  
在原光嚴相臣

入道種あひゆみぬて秋の

九条前田左衛門

露おもとくらうつる縁のあらわすじむ  
衣笠あゆむ  
おのほき村とほりえを金城よりかし  
もは家仲納云

経明院大貳

わうわうの肩と筋と筋あらわすじむ  
室太辰宣平之後女  
世ふるにまよひておもひて者よどむ人の世と

金道も接段

れい世ふるはのとくしてそいはと界よだれう  
曉の御えのひの神とすほはせうの神の極よ  
経福経百字歌 三信知家

いはゆふ林夕とくもと世ふるしきと在りや  
信玄社れ世のそに  
せとすくわすれぬ事とがまうむれられ  
まゆのまゆ

右以或中書寫平不審繁多也

一信平

二三子中書寫平不審繁多也

